

「港区地域こぞって子育て懇談会」 関係者から生まれた事業や活動

平 野 幸 子

はじめに

明治学院大学社会学部附属研究所相談・研究部門(以下、当所)は、ソーシャルワーカーによるコミュニティワーク実践として、港区立子ども家庭支援センター(以下、子家セン)の事業「港区地域こぞって子育て懇談会」(以下、懇談会)に関わってきた。この懇談会では、子ども・子育ての環境向上をめざし、立場を超えた人々との対話の場を創ってきた。対話の場を通して、「施策やサービス・たくさんの仲間・子ども子育て応援関係者のネットワーク・ひとりぼっちで子育てしない安心のまち」等々を生み出したいとの願いをもって続けられてきた。2006年度より2015年度の10年間、懇談会は子家センと当所が共催したが⁽¹⁾、その間に、多数のコラボレーションが生まれ、具体的に子どもや子育てを応援する事業や活動が複数生まれた。これらの実践は、懇談会の願いが形になった一つひとつの姿である。懇談会という対話の場が創られたことによる成果といってもよいかもしれない。当所ソーシャルワーカーが、生まれた事業や活動のすべての過程に関与したわけではない。だが、地域活動相談として、協議/検討場面に参画したり、関わるメンバーからの局面ごとの相談に応じたり、濃度に違いはあるが関わりをもたせてもらった。

本報告は、懇談会関係者から生まれた事業や活動の、生まれた経緯や現状の実践内容・課題

・展望等について、2017年7月・8月時点の関係者から得た情報を基に、その内容を記録化した。記録化と共に、地域活動上の課題、地域内の団体間のネットワークの有り様、実践者の視点による子ども・子育て環境の有り様等について考察することも試みた。また、当所ソーシャルワーカーにとっては、今後のコミュニティワーク実践展開のための、地域内ニーズを知り得る情報収集の機会とした。

1 「港区地域こぞって子育て懇談会」関係者から生まれた事業や活動

「港区地域こぞって子育て懇談会」関係者から生まれた事業や活動として、以下の6つの事業と活動について記録化した。関係者から生まれた事業や活動とは、懇談会を開始した時点(2006年度)には全く姿はなく、主催機関そのものや実行委員として関与した地域住民の取り組みにより興された事業や活動である。

◆「港区地域こぞって子育て懇談会」関係者から生まれた事業や活動

(生まれた活動1～5は設立年度順に記載。()内は当該事業/団体の設立年度)

- (1) 生まれた事業「地域こぞってネットワーク会議」(2010年度)
- (2) 生まれた活動1「みなと子育てネット Wa.Wa.Wa」(2006年度)
- (3) 生まれた活動2「みなとチャイルドラ

イン」(2011年度)

〈4〉生まれた活動3「みなとでこぼこうさ
みち」(2013年度)

〈5〉生まれた活動4「みなと外遊びの会」
(2014年度)

〈6〉生まれた活動5「一般社団法人みなと
こぞってネットワーク」(2015年度)

2 記録化の方法

上述の6組の関係者に対し、生まれた経緯や現状の実践内容・課題・展望等の情報を整理するため、以下の項目を提示しながら面談し、改めて情報を確認した。面談は、2017年7月21日(金)～8月28日(月)の間に実施し、当所ソーシャルワーカー平野が担当した。

◆提示項目

- 1) 実践開始の経緯や理由
- 2) 現在の関わるメンバーや属性等
- 3) 現在の実践内容
- 4) 連携する団体やネットワークの状況
- 5) 実践してきて課題と感ずること
- 6) 地域こぞって子育て懇談会(実行委員会や地域こぞってネットワーク会議含む)との関係(期待)
- 7) 子ども・子育て環境向上のため望むこと(地域社会や行政に対して)
- 8) 今後の展望

3 面談の記録

以下の通り、面談内容をまとめた記録を提示する。回答者の肩書は、面談実施日現在である。

〈1〉生まれた事業「地域こぞってネットワーク会議」

面談実施日：2017年8月28日(月)

9：30～10：20

回答者：前港区立子ども家庭支援センター所
長/現港区児童相談所設置準備担当

課長 保志幸子氏

港区立子ども家庭支援センター所長

中島由美子氏

1) 実践開始の経緯や理由

2000年以前より先進的に子育て支援を推進する自治体は、地域内の諸団体と連携する催しを実施していた。2009年度当時(保志課長が子家セン赴任当初)、子育て当事者による活動団体は少なく、グループづくりを呼びかけたいと考えていた。懇談会に、団体には所属しない個人が集まれる姿は、港区の特性としてもよい。一方、団体の育成やつながりを生み出す必要も念頭にあり、当所が活動者の掘り起こしを実践していたので、その動きと併せていきたいと考えた。懇談会に関し当所と協議する中、地域こぞってネットワーク会議(以下、ネットワーク会議)開催案が出たときに「これだ」と思った。当所は、懇談会共催以降、参加者から年1回だけではなく、もっとつながりの場が欲しいとの意見が毎回残されたことと、2008年度懇談会に13組の子育て支援事業所/団体等にコメンテーターとして参加してもらった際、枠を超えたつながりの場がほしい、との声が残されたことから、ネットワーク会議開催を提案した。

企業等民間とどのようにつながるかという課題もあった。保志課長は児童館勤務時代に企業の社会貢献者とのつながりを経験し、そうしたつながりを区全体にも拡げたい思いがあった。いろいろな人たちがフリーに集まるネットワーク会議は、港区らしい新たな姿と思った。表向きは新事業だが、区としては懇談会の一環として検討できたので実現しやすかった。

2) 現在の関わるメンバーや属性等

子家センの担当は、懇談会担当係長職。2017年度運営支援委託先である一般社団法人(以下、

港区 子どもと子育て応援...いろいろな分野のみなさんのご参加も歓迎です!

地域こぞってネットワーク会議

※本年度 40団体参加!

...情報交換と関係づくりの場です...

港区内の子育てや子どもたちを必要とする関係機関 / 団体のみなさん
地域のつながり作り / まちづくりに関わるみなさん
同じ地域で活動する / はたらく者の情報交換と関係づくりの場です。
いろいろな分野のみなさんのご参加も歓迎です!
真実を交換し合いたいというコミュニケーションが
生まれるかもしれません。

港区の中で、
子育てしやすい環境にしよう
子どもたちの将来を応援しよう
同じ目標をもつ関係機関 / 団体、
民間企業など、
互いの強みや弱みを
交換し合おう
協働の可能性を創出しよう。

情報交換会では
名刺または、連絡先が
わかるものを
お持ちください。

6月23日(金)
18:30~21:00

みなと保健所8階大会議室
(最寄駅: 赤羽橋駅、麻布十番駅)
※近隣の駐車場は、使用できません。

■場 所: 情報交換と交流 (自己紹介、名刺・情報交換)

■参加申込: 5月22日(月)~6月22日(木)までに
みなとコール ☎ 03-5472-3710
※午後9時 (前日は午後2時) ~午後5時受付

■場 所: 5人程度 (4か所一室程度まで)
6月15日(木)午後5時までに申し込みください。
みなとコール ☎ 03-5472-3710
※午後9時 (前日は午後2時) ~午後5時受付

■費 用: 参加費 / パブリック等当日午後5時30分までにお申し込みください。
配布資料にご協力ください。参加費は1,000円です。
※、当日お持ちいただくのは6月22日までにご下調べください。
港区子どもと子育て支援センター
〒108-4315 港区三田一丁目4番10号 地下1階 受付
※電話: 港区のみの 070-5455-0640(受付)までご連絡ください。

主催: 港区子どもと子育て支援センター 協賛: 港区人みなとこぞってネットワーク 協力: 港区立人文学社(港区立保健所内)

2017年度地域こぞってネットワーク会議の告知チラシ

(一社)みなとこぞってネットワーク。

3) 現在の実践内容

2017年度は、6月23日(金)18:30~21:00に開催した。86名、50団体の参加があった。2010年度以降、1月開催の懇談会から約半期おいた時期の6月に開催する形式で継続している。

呼びかけは、各種子育て支援事業所、公立小・中学校やPTA、子ども・子育てにかかわる非営利団体、民生委員等の地域活動者、企業の社会貢献担当者等、可能な範囲で網羅的にやっている。

4) 連携する団体やネットワークの状況

(一社)みなとこぞってネットワーク、懇談会の実行委員会、運営協力団体として当所、これまでのネットワーク会議参加団体等。

5) 実践してきて課題と感ること

名刺交換して終わりではなく、出会いから化学変化が起き、なにかができる場になるにはどうしたらよいかと考えてきた。企業の参加は歓迎だが、社会貢献より自社製品紹介に力点が置かれることもあり、その整理に課題を感じた。その後、「私たちは、(他者に)こんなことができますよ」と発表し合い、つながりたい中味や団体の神髄が表れ、生まれたコラボレーション事例は、翌年のネットワーク会議で紹介するようになった。

懇談会から「とりもつ人(びと)」という言葉が生まれ、人と人をつなぐ役をやりたい人がいることは、質の高いことだと思った。懇談会開始当初、いろいろな人が集える場が欲しいと発信されたが、それは安心の場所だけ欲しい、ではなく、とりもつ人の存在が大事だと気づいた。区が設置する子育てひろば等も、そのような場に成長できるとよい。

活動者等の出会いと交流の場として、現状の回数以上にネットワーク会議を開催したい、との声があると聞く。受託法人が独自開催することに問題はないが、同じ名称での開催は区民にとってわかりにくいので、わかるようであってほしい。

6) 地域こぞって子育て懇談会(実行委員会やネットワーク会議含む)との関係(期待)

ネットワーク会議の今後として、行政としてこの場を作らなくても、団体や実践家同士が、自然につながればよいのだろうと考える。だが、今はこの機会があることでつながるとすれば継続する必要がある。団体が活動しながら強みを意識したり、活動を絞ったりするのと同様、このネットワーク会議も、積み重ねながら運営方法を工夫し改善するとよい。行政は公費を使う立場だから公平でなければならないが、窮屈にならないようにしたい。民間の活動は、

自分たちで考え、使命をやり抜くことが大事なので、程よい接点を探っていきたい。

7) 子ども・子育て環境向上のため望むこと (地域社会や行政に対して)

2016年度に実施した、子育て・家族支援者等を養成するNPO法人あい・ぽーとステーションと港区(子家セン主管)による催し⁽²⁾は、今後も3年に1回程度継続的に開催したいと考えている。上記の第2部で、(一社)みなとこぞってネットワークが取りまとめ、ネットワーク会議に参加した諸団体がプレゼンテーションや展示等を行った。この催しは個人で活動する人と団体等との出会いを拡げる機会になった。懇談会には子育て当事者も参加する。子育て支援の現場には、個人で活動する人たちも活躍している。地域の一人ひとりによる視線や預かり合いがあって、子どもたちが育っていくと思うが、そうした意識をもつ人々を育てていきたい。その先としては、地域内に里親を担える人/家庭を増やしたい。その土台となる個人の育成が求められる。今後の児童相談所開設を視野に入れ、一人ひとりの意識が変わっていくような場もつくりたい。地域に拡がる様々な団体の活動が展開し、個人による支援活動も拡がり、児童相談所という高機能の子どもへの支援と、子ども家庭支援センターによるすべての子どもと子ども家庭を対象とする支援が拡がる、という多層の支援やそれらの連携が必要である。行政の仕事は一握り。丁寧に支える人たちが、この地域に多層的に多数いなければ、すべての子どもと子ども家庭の支援はむずかしい。行政内は、子ども支援に携わる部署ごとに、地域内ネットワークづくりの方針が掲げられるが、地域内の実践者は重なり合う。会議体ばかりが増えるという形式ではなく、実態に即し、実際に機能するネットワークの創出が必要である。

8) 今後の展望

ネットワーク会議のもち方として、企業と子育て支援を担う非営利団体等との出会いとマッチングの場に特化する企画もありだろう。幼稚園/保育園/学校の保護者つながりのグループが、複数存在することがわかったので、また意図的に呼びかけたい。2011年度の大震災後、隣の人とのつながりづくりの大切さを発信し有意義だったが、意識が薄れる中、再度行えるとよい。

7)の通り、すべての子どもと子ども家庭支援に関わる多層にわたる人々や団体等と連携するため、このネットワーク会議をどう活用できるか、様々な支援者や住民とどう協働していくのか、関係者と十分に相談をしていきたい。

〈2〉生まれた活動1：みなと子育てネット Wa.Wa.Wa

面談実施日：2017年 7 月21日(金)

10：00～12：00

回答者：代表 廣田千秋氏

1) 実践開始の経緯や理由


2004年度に参加した保育付き講座の講師に後押しされ、ママ向け講座を企画する団体として、「おおきなき」を設立し、2005年度、当所主催の市民講座⁽³⁾で活動紹介をした。その時共に活動紹介したり、当日参加した団体が、講座後もつながりをつけようとの意向から設立した。翌年の2006年度、懇談会の実行委員会に設立メンバーが関わった。2007年度と2008年度懇談会の実行委員会は、当団体のプロジェクトが企画を担った。

2008年度、独自の活動としてみなと区民まつりに出店し、以降、毎年出店を続けている。出店の目的は、つながりの子育て支援グループの活動PRと活動資金作りだった。

2008年度、地域子育て情報紙POPOPOを発

みなと子育てネット

Wa.Wa.Wa.




子育てグループなどのネットワーク
 子育てで活躍するイベントの企画と運営実施
 子育て環境向上のためのアクション

「子育てやママサークルなどの情報交換の場がほしい」という思いのもと、子育て当事者グループのネットワーク作りを始めてきました。港区で自主的に活動している様々な子育て当事者グループの運営メンバーと子育てを支える地域創りに関心のある人々が、2007年から明治学院大学社会学部付属研究所に集まり情報交換し、イベントを通して情報発信しています。

「子育てを支えあうことで、子育て中の家庭だけでなく、すべての人にとって暮らしやすい地域社会を実現する」という趣旨のもと、様々な人と出会いつながりをもつ機会を作っていくと考えています。

おまつりプロジェクト



みなと区民まつりに、2008年10月、子育てグループのPRもしようと思いついてから毎年参加になりました。


翌年の1月に行われる「港区こぞって子育て懇談会」PR、子育てグループのPRをはじめ、手作りクッキーや、いろいろなゲームに子ども用品のフリーマーケットをしています。売り上げのお金は、それぞれのグループの活動費と被災地への義援金として寄付をします。

すこし無理を覚悟してやる活動がモットーのお祭り参加です。

2017年(10月連休)も参加いたします。

子育てグループの方、一緒に参加しませんか？

お問い合わせは
chiakinakagor@yahoo.co.jp
(ヒロタチキまで)



「子ども」「子育て支援」「親子」「地域」などをキーワードとする情報を交換しましょう！

地域の中でのつながりをつづけてよう！地域の中の手助けを共有しよう！という、情報発信用のメーリングリストです。

みなと子育てネット Wa.Wa.Wa. ML 事務局が管理しています。(メールアドレスの管理は、みなと子育てネット Wa.Wa.Wa. ML 事務局です。港区の事業ではありません。)

登録希望の届とお名前・所属(ある方のみ)を書いてメールしてください。お名前を必ず書いてください。(お名前がない場合は受け付けられません)

minatokosodate@gmail.com

あなたも「みなと子育てメーリングリスト」へ登録しませんか？

「みなと子育てネットWa.Wa.Wa.」活動紹介

行し、POPOPOチームとして、港区社会福祉協議会の子育てサロンにも登録した(2009～2011年度間)。

2) 現在の関わるメンバーや属性等

現運営メンバーは、代表と会計担当者2名。区民まつり出店当日は、団体設立当初メンバーが現在も関わる。3)の通り、懇談会実行委員会や諸団体との連携による出店方法をとるので、当日の運営協力者は毎年多数いる。

3) 現在の実践内容

毎秋の、みなと区民まつりへの出店。2017年度で9回目。子ども服やおもちゃ等の不用品によるフリーマーケット、協力者による手作りお菓子の販売、子ども用に宝釣りや市販のくじが主な出店内容である。

出店には打ち合わせへの参加や費用が必要の

ため、2010年度以降、自力出店の難しい団体に共働で出店しようと呼びかけ、売り上げを活動資金として分け合う。結果、2～3年間共働出店した団体が、その後自力で出店できるようになる団体も出現した。つながりの団体が、区民まつりのステージ出演することにも尽力している。

出店目的は、当初の活動PRと資金作りに変更はないが、2011年度以降、懇談会の予告チラシの配布も定番となり、毎年、懇談会実行委員も協力している。2011年の大震災以降、売り上げを被災地支援の寄付金にも充てている。

4) 連携する団体やネットワークの状況

主に代表が知り合い、共働出店を呼びかけた団体。懇談会の実行委員会。形式ばった規約下での活動ではないことを理解し、協力し合える団体/人に呼びかけている。

5) 実践してきて課題と感ずること

共働出店した人やステージ出演した団体の中には、当団体の出店コンセプトを理解してもらえないケースもあった。共働出店の呼びかけや広報活動が、現在は代表の人脈への投げかけのみであり、他メンバーの協力は得られていない。区民まつりは年1回だが、一緒に店員さんしながら関係を作り、楽しめる活動なので、気軽に呼びかけ、つながり、顔見知りを増やせる場としたい。若い人の参加を増やすことが課題である。

6) 地域こぞって子育て懇談会(実行委員会やネットワーク会議含む)との関係(期待)

ネットワーク会議や懇談会、実行委員会でのつながりを通じ、出店呼びかけ、出店の手伝い、当日遊びに来てね～と呼びかけている。逆に区民まつりへの参加から、ネットワーク会議や懇談会、実行委員会への参加も誘っている。会議体とは異なる、いっしょに作業し、楽しくおしゃ

べりしながら信頼関係を築き、つながりを深める場でありたい。

回答者：代表 藤澤克己氏

7) 子ども・子育て環境向上のため望むこと (地域社会や行政に対して)

子どもたちが自分たちで企画する催し、千葉市で行なわれている「こどものまち」のような催し⁽⁴⁾を行える地域になりたい。「こどものまち」は、子どもによる、子どものための、子どもだけのまちで、子どもたちが、自ら、まちについて考え、話し合いや、創作活動をしながら、まちを作り出していく遊びプログラムである。この過程で、子どもたちは主体的に関わることの楽しさや、やりがい、自尊心、他者への信頼などを得て、心の成長が促される。大人の役割は、子どもたちの取り組みを周りで見守ることである。こうした催しを行える、その発想を共有できる大人たちがあふれる地域でありたい。

8) 今後の展望

今後も、みなと区民まつり他、他のまつりへの出店を含め、まつり出店を通じた活動を継続する。活動PRとつながりづくりは変わらぬコンセプトだが、まつりに来る子どもたちとの関わりも十分楽しみたい。これまで、共働出店した団体関係者の子どもたちが、店員さんをする機会にもなってきた。これからも子どもが活躍できる場にしたいし、関係者の子どもたちが大きくなってからも、一緒に活動できる場でありたい。まつり出店の場を、7)で挙げた「こどものまち」コンセプトを実現するような活動の場にして、子どもたちの活動をサポートしていきたい。

(3) 生まれた活動2：みなとチャイルドライン

面談実施日：2017年 8 月28日(月)

13：30～14：30

1) 実践開始の経緯や理由

前代表(当時幼稚園児と小学生の母親)が、懇談会の実行委員を経て関わった、みなと子育てネットWa.Wa.Waとして品川の子育てメッセに出店した際、しながわチャイルドラインの存在を知った。港区内にも、子どもたちの電話を受けるチャイルドライン⁽⁵⁾の活動がほしいと思ったことがきっかけとなり設立。品川で活動していた港区内メンバーや、懇談会で知り合った民生委員等の協力も得て、2011年10月から活動を開始した。各地にチャイルドラインはあるが、日曜開設のラインはなかったことから、日曜を活動日とした。

2) 現在の関わるメンバーや属性等

現在20名が活動している。港区内の発起人と協力者により設立したが、現在在住/在勤メンバーは減少。日曜の活動日は平日勤労者が活動できることと、活動拠点が交通アクセスのよい場所にあることから、インターネットで情報を得て、他地域から集まったメンバーが多数となっている。本業をもつ人が多く、30～40代中心。

3) 現在の実践内容

週2日間、日曜17～20時、火曜18～20時にチャイルドラインを開設(火曜日は2015年から)。開設日は最低2人で担当。受け手ボランティアは、養成講座を受講し、インターンを経て活動可能となる。毎年養成講座を開催してきたが、2017年度は運営上の課題から実施しない。運営体制は、代表、副代表、研修担当、会計。運営会議は月1回開催。

電話で子どもの声を受け止め寄り添うほか、子どもたちの課題について、講演会等を通じて

みなと チャイルドライン



●チャイルドラインとは

- ・18歳までの子どもの「電話でつながるこころの居場所」です
- ・全国に約70のチャイルドライン団体があります

●みなとチャイルドラインは

- ・港区を拠点に約20名のボランティアで活動しています
- ・毎週日曜日(5～8時)と火曜日(6～8時)を担当しています

子どもたちが 自身の力を発揮して
笑顔になれる社会を 目指します



※詳しくはホームページをご覧ください
<http://minatocl.webcrow.jp>



0120-99-7777

「みなとチャイルドライン」活動紹介

発信することも重要な役割と考えている。

4) 連携する団体やネットワークの状況

NPO法人チャイルドライン支援センター、チャイルドライン東京ネットワーク、アドバイザーとして助産師と産婦人科医、監事として税理士。

5) 実践してきて課題と感ずること

運営メンバーが減少し体制維持に困難を抱えている。特に、研修の実施や調整等を担当する研修担当者が得られず、養成講座を実施できない。電話を受けるスキル向上のために研修は必須だが、研修への参加状況が芳しくない。スキルが向上しないと、子どもからの電話の真のニーズを聴き取れないと考えるが、研修の必要性の共有が難しい。研修に限らずこの活動に優先度をおき、電話を受ける活動以外の活動も、共に

行おうという機運を作り出せていない。養成講座の場だけでは、社会的な意義を共有できない。

2期養成講座以降、港区内メンバーが減少し、地元感をもてるメンバー少なくなった。チャイルドライン支援センターの全国フリーダイヤルを使用する関係で、電話をかけてくる子どもは港区内の子どもとは限らない。だが、地元のおじさん/おばさん/お姉さん/お兄さんがやっているという安心感、港区にそうした大人がいることを、子どもに示せることは大事だと思うので、地元メンバーを増やしたい。

6) 地域こぞって子育て懇談会(実行委員会やネットワーク会議含む)との関係(期待)

懇談会やネットワーク会議で地元メンバーを募りたいが、活動をもつ参加者が多いので効果がない。情報交換の場としては有効だが、活動を選びたい人対象の場もあるとよい。2017年8月に、NPO法人暮らしのグリーフサポートみなと主催講演会で活動紹介を行ったが、今後こうした関係団体と共働する場を求めたい。

7) 子ども・子育て環境向上のため望むこと (地域社会や行政に対して)

地元の大人が子どもたちの声を聴く活動をしている、この地域にそういう大人がいることを、子どもに示せることは大事だと考えている。この活動を子どもたちに知らせる手段として行っているのが、チャイルドラインを知らせるカード配布である。チャイルドラインは都内の各区には存在しないので、港区と他1区への配布作業を担当している。その他区では、公立学校への運搬手段として、区役所交換便を使用できる。港区は、配布は可能だが交換便は利用できず全校へ発送する。その費用負担が大きい。子どもたちを思う大人の存在を知らせる機会であり、子どもにとっての大切なインフラとして理解し

てもらい、公立学校への交換便による配布に協力してほしい。

8) 今後の展望

子どもたちの声を社会に発信する活動を意識的に行いたい。他の関連団体と共働していききたい。子どもに寄り添う活動はもちろんだが、理解ある大人を増やすことも、チャイルドラインの重要な活動である。地元の団体等関係者たちと、シンポジウムを企画し発信していきたい。各団体と共働したり、相互に相乗りしたりする方法がよい。

〈4〉生まれた活動3：みなとでこぼこうさみち

面談実施日：2017年 7 月21日(金)

13：30～14：30

回答者：代表 志牟田美佐子氏



活動目的
みなとでこぼこうさみちは、「落ち書きがない」「集団行動が苦手」など、発達に課題のあるお子さんとそのご家族が地域の中で孤立しないよう集まっている地域づくりを目的として設立したグループです。
グループの名前は「発達でこぼこ」を「受け入れ(こ)」「支え(さ)」「見守る(み)」のそれぞれの漢文字をつないだものです。
障がいのある人にとって過ごしやすい地区は、すべての人にとって過ごしやすい地区というユニバーサルデザインに基づいた地域づくりを目指します。

わたしたちにできること
・受け入れる
・支える
・見守る
地域づくりが大切

活動内容
■でこぼこサポートマップの作成とインターネットなどを活用した情報発信
■でこぼこ広場(例題)でこぼこのあるお母さんと家族が本音で語る場の提供
■でこぼこサポートマップの作成とインターネットなどを活用した情報発信

活動実績
■でこぼこサポートマップを3000部発行(平成26年度港区NPO活動助成事業)
「平成26年度港区NPO活動助成事業助成金」を活用して、発達の課題に対しての支援機関などの機能、利用者(当事者の保護者など)の視点で紹介した「でこぼこサポートマップ」を発行しました。
平成28年度に最新版を発行予定(読者たすけあい運動による地域福祉活動助成事業)。
■でこぼこサポートマップの活用
区市町村と経験豊かな家族を招いて、子育て・子育て支援の向上に関心ある地域の人々や支援者や当事者の家族に、発達でこぼこを理解し正しい対応や環境を整える方法を考える講座を4回開催し、のべ120人の「でこぼこサポート」を養成しました。

電話番号 080-8876-4857(1カブゼンビル内 担当:下村)
メールアドレス dekokousamichi@gmail.com
ホームページ <http://dekokousamichi.jmdo.com>
フェイスブックページ <https://www.facebook.com/dekokousamichi>

「みなとでこぼこうさみち」活動紹介

1) 実践開始の経緯や理由

2013年度懇談会の分科会テーマ「どの子どもも過ごしやすい地域づくり」を担当した実行委員が、発達に課題のある子どもたちも、その家族も孤立せずに地域で過ごせるための、ネットワークづくりを目的として設立。本テーマを継続的に考えていくためだった。2014年3月に発足会を実施し活動を開始した。

2) 現在の関わるメンバーや属性等

事務局として、代表1名、会計1名、運営委員3名の計5名。設立当初、発起人として募った人が24名(現状関与していない人も含む)。メーリングリスト登録者59名(事業の参加者が登録)。属性は、発達障害児者の保護者、発達支援事業所関係者、保育園/幼稚園/児童施設等職員、地域活動者など。サポートマップ取材先の登録もある。

3) 現在の実践内容

「でこぼこサポーター養成講座」地域の人々に発達障害を理解してもらうための講座。2015年度までに計4回実施。延べ120名のサポーターを養成。

「でこぼこ広場」発達についての心配事を本音で話せる場として開催。

「でこぼこサポートマップ制作」2015年3月に港区NPO活動助成により、2015年版を3,000部発行。2017年3月に歳末たすけあい運動による地域福祉活動助成により、2017年版を2,000部発行。

4) 連携する団体やネットワークの状況

サポートマップ制作の取材先事業所/団体や行政、メンバーが催し等に参加した他団体等、港区内外約30団体と顔つながりがある。広報協力は行っているが、事業の共働開催や連携は実

現していない。

5) 実践してきて課題と感ずること

養成講座は、参加者が当事者関係者中心で、対象にしたい地域の多様な人々への展開には課題があり、2016年度以降実施していない。内部では、講座開催よりも既存の人々が集うところへ出向いて発信し、広場へ誘おうという意見もある。

でこぼこ広場事業は、本来立場のちがう人が集まり、それぞれの話を聴いて気づきを得たり、情報交換できる場である。だが保護者は誰がいるのかわからない場では話しにくく、支援者は支援者としての辛さを出しにくい。現在は、学習会と支援者の情報交換目的の場を分けようという意見である。

当事者自助グループと発達支援者と地域活動者が連携できるような中間支援を目的として設立したが、事業所の急増で、情報を追い切れていない。

運営面では、資金調達が課題。会員に対し会費を請求する仕組みが確立していないので、善意の寄付に頼る状況。サポートマップ掲載団体に、活動継続の趣旨を伝え賛助会員になってもらい、会費をもらえるようにしたい。

サポートマップを電子化すれば広告収入や会費収入で発行できるのではないか、広告掲載があると公共施設での配布は不可かもしれない、パスワードを入れてダウンロードする方法での有償頒布はどうか等々検討している。サポートマップは、紙媒体も必要とも考えているので、クリアすべき課題が多く、足を踏み出せていない。

サポートマップの内容に関し、急増する児童発達支援事業所等は本当に多様だが、関係を築けた事業所等を掲載している。利用者視点を入れたマップを作りたいが、読み手の受け取り方

は様々なので、2017年版は客観的な情報のみとした。

事務局メンバーの事情から活動は縮小、メーリングリストやSNS、ホームページによる広報活動が滞っている。

6) 地域こぞって子育て懇談会(実行委員会やネットワーク会議含む)との関係(期待)

事務局メンバーが固定化しているため、懇談会参加者等から新たなメンバーを募りたい。

7) 子ども・子育て環境向上のため望むこと(地域社会や行政に対して)

各団体には資源があるので、それらが有機的につながるとなおよいだろう。子どもと子育てに関し、子家センがワンストップの場だと思うが、行政は公平性の観点をもち、また営利活動には制限がある。要支援の深刻な課題のある子ども家庭への支援と、多様な実践者も参加する懇談会やネットワーク会議は、同じセンターの傘下だが、別設定のように思われる。それらがつながることで相互支援できる部分もあるだろう。

発達支援関係の事業所や団体が集まる会議を開催したい。区の呼びかけによる連絡会は始まっているが、自分たちは参加できない。活動を展開する老舗NPOが、そうしたつながりづくりの場を実施してくれたら集まりやすいかもしれない。

8) 今後の展望

掲載先をどうするか等の課題はあるが、サポートマップ制作は継続する。その先として、中間支援の役割＝会や団体同士をつなげていけるとよいと考えている。マップ制作からみえた支援の有り様や知り合った掲載先が一堂に会するような、報告会企画を実現したい。また細々でも、でこぼこ広場を続けていきたい。学校の

教員や教育センターとのつながりをもっともきたい。

(5) 生まれた活動4：みなと外遊びの会

面談実施日：2017年 8 月18日(金)

14：30～16：00

回答者：代表 上野志摩氏

運営メンバー コノリーさやか氏

プレーリーダー 嶋村仁志氏

1) 実践開始の経緯や理由

2010年度から港区がプレーパーク事業を開始したが、その企画運営はNPO法人日本冒険遊び場づくり協会(以下、協会)に委託⁽⁶⁾。区の方針として住民運営によるプレーパーク事業がめざされたが、まずは、区民がプレーパークを体験する機会提供が始まっていた。一方、2011年度懇談会で、パパたちによるプレゼンテーション企画を行ったが、その父親の一人が上記事業に接点をもっていた。その父親は、災害時はどう子どもたちを守るかというテーマで、プレーパークが地域内に存在し、サバイバルスキルを得るために公園を活用したいとプレゼンした。この懇談会上記協会や行政関係者らも参加し、懇談会の実行委員とのつながりが生まれた。その後、区の呼びかけにより、住民と区との協働によるプレーパーク事業を模索する協議の場が設けられ、複数の実行委員が参加した。上野氏は、2010年度から実行委員となり、何か活動に参加しようと思ったタイミングであり、子どもと体験プレーパークに参加していたことから、上記の場にも参加した。2012年度懇談会では、外遊びを考える分科会を実施。体験プレーパーク事業に携わるプレーリーダーも実行委員として参画した。区の呼びかけによる協議の場は継続し、実行委員(経験者含む)が複数関わりつつ、2014年 2 月に任意団体みなと外遊びの会

が設立した。同時期に行われた2013年度懇談会では、世代を超えて「遊ぶ」を考えるテーマの分科会が企画され、みなと外遊びの会が現代の遊び場としてのプレーパークを紹介した。その後も、みなと外遊びの会運営メンバーと、区側担当者との運営面の協議の場が継続し、2016年度冒頭、港区のプレーパーク事業要綱ができています。

2) 現在の関わるメンバーや属性等

運営メンバーは現在 8 名。地域サポーターという、参加するだけではなくサポートしようとの思いのある人がメーリングリストに多数登録している。運営メンバーは母親中心で、会議をもちづらいので、現在はLINEを活用して協議している。隙間時間に協力できる人もいるので、臨機応変に運営を進めている。2017年度に入り、チャレンジ・コミュニティ・クラブ(以下、CCクラブ)⁽⁷⁾関係者などのシニアメンバーも参加し、子育て世代の運営メンバーを支える体制も整ってきた。

3) 現在の実践内容

2017年度、高輪支所管内は、高輪森の公園で月 1 回、亀塚公園で月 1 回、芝浦港南支所管内は、港南 3 丁目公園で月 1 回のプレーパークが実施されている(2017年度 7 月、8 月、9 月の予定表参照)。

4) 連携する団体やネットワークの状況

港区高輪支所と芝浦港南支所の協働推進課まちづくり担当プレーパーク担当者、港区土木課、CCクラブ関係者、公園指定管理事業者、プレーパーク実施公園の周囲の地域関係者等。

5) 実践してきて課題と感ずること

現運営メンバー間や運営を応援してくれる



「みなと外遊びの会」2017年度7月、8月、9月の予定表

CCクラブ関係者含め、連絡手段に幅があり、一本化できない。また法人化にあたり、ホームページ作成は必須のため準備中である。

現在、任意団体から特定非営利活動法人化へ向けて協議と準備を行っている。背景として、区側がプレーパーク事業を住民が担うのは難しい場合の選択肢も考え始めているという話が出てきたこともある。会としてその選択肢は本意でない中、2016年度末運営メンバーがつながりを築いたCCクラブ関係者から、法人化への支援を含め、運営を支えようという申し出があり、今に至っている。区側にもその旨表明しているが、今後どのように区との協働が成り立つかどうかは未定である。これまで区と協議しながら実践してきたが、公園の所在地により、支所の担当が異なり、対応も異なるため、難しい部分も存在している。

6) 地域こぞって子育て懇談会(実行委員会やネットワーク会議含む)との関係(期待)

嶋村氏によると、当初協会の立場からは、共に活動する住民との出会いが課題だった。だが、初期の段階での懇談会の実行委員とのつながりが、会の発足につながった。懇談会の存在や継続的に担う事務局の存在は、自身の安心に大きくつながったという。

7) 子ども・子育て環境向上のため望むこと(地域社会や行政に対して)

プレーパークは、子どもには秘密基地のようなものであり、本来、大人が管理/監視するものではない。子どもたちだけで行ける場を作りたい。プレーリーダー⁽⁸⁾という職位の確立もしたい。地域内に、子どもたちが、子どもたちだけで自由に好きに遊ぶ場を増やしたい。

8) 今後の展望

プレーパーク当日の参加親子が、運営の場にも楽しく参加でき、子どもも親もつながり交流しながら、一人の負担が大きくなならない協力の仕方プレーパークを開けるとよい。

プレーリーダー雇用や養成のための資金が確保できれば、これからプレーリーダーをめざしたい人に声がけし、トレーニーの位置づけから関わってもらうことも可能となる。当地で育ったプレーリーダーが、長いスパンに関わり続けてくれることが理想である。そうしたプレーリーダーの下、保護者層の運営メンバーは、負担の大きくない範囲で貢献していきたい。そうした人材を得るためには、日々多様な人たちが関わってくれることが必要であろう。自然にふれて外遊びをするプレーパークに抵抗を感じる家庭もあると思うが、「子どもらしいことをやってもいい場所なんだ」という雰囲気は広がることを願っている。月1回でもよいので、子ども

たちが楽しいことができる場だったことを思い出してもらえる場でありたい。

〈6〉生まれた活動5:一般社団法人みなとこぞってネットワーク

面談実施日:2017年 7 月28日(金)

13:30~14:30

回答者:代表理事 廣田千秋氏

理事 志牟田美佐子氏・中島佳世氏

1) 実践開始の経緯や理由

2013年度、前代表理事から懇談会実行委員に法人発足の呼び掛けがなされた。懇談会を住民の手により恒常的に開催しよう、また、興った活動がより展開できるよう支援しようという趣旨だった。その背景には、懇談会の事務局を担った当所が、10年の節目で降りることが公になる状況があった。廣田代表理事と志牟田理事は、ネットワーク会議と懇談会を継続したいとの思いから発足に関わった。中島理事は、自身の活動の展開に課題を感じたタイミングで声がけされ、当ネットワークの傘下で活動支援を受けられることに意義を感じた。2014年度、発起人として名を挙げた実行委員と共に、ビジョンとミッションを協議する場をもち、2014年度の懇談会(2015年1月開催)で設立を表明、2015年度冒頭、法人として登記完了。2015年度懇談会の運営に協力。2016年度、港区よりネットワーク会議と懇談会の運営支援を受託した。

法人のビジョン(実現したい社会)は、「すべての子どもたちが未来を自分らしく創造するために、大人たち誰もが子育ての当事者となり、つながり、子どもたちの心に寄り添える社会」である。

2) 現在の関わるメンバーや属性等

代表理事 1 名、理事 3 名、監事 1 名、設立時

正社員 3 名。すべて懇談会実行委員経験者。

3) 現在の実践内容

2016年度と2017年度、ネットワーク会議の企画運営を含む「港区地域こぞって子育て懇談会」の運営支援を区より受託。その他、以下の事業等を行う(2017年度総会資料より)。

1. 対話の場づくり事業
2. とりもつ事業(ネットワーク構築事業)
3. 他団体連携・共働事業

4) 連携する団体やネットワークの状況

港区立子ども家庭支援センター、会議や懇談会への参加団体等、港区内約50団体(2017年度団体数)、港区社会福祉協議会、当所ほか。

5) 実践してきて課題と感ずること

ネットワーク会議や懇談会の企画運営や他のイベント等との関わりにより、様々な団体とのつながりを作ることができる。だが現状、団体とのつきあい方が明確とは言い切れない。とはいえ、自分たちの団体側としてなにがしか規約を作り、つながる団体の枠を作る必要はないだろう。実践したいことは、人と人、人と団体、団体と団体等との「とりもつ役」である。声がけされたり、声がけしたり、興味をもちあうことが大事で、その上でお互いにめざすことや、考えていることを知り合い、協力し合うためのスタート地点に立てる。

つながりをもてた団体の可視化のために、団体内資料としてマッピング作成を積み重ねることは一案だろう。だが、顔つながりができた後のつながり、つながり続けるための取り組みは十分には行えていない。つながりのためのツールのひとつに、子育て情報発信のためのメールングリスト^⑨がある。だが、発信してよいかわからなかったという登録者の声もあり、十分

一般社団法人 **みなとこぞってネットワーク**

2017年度 港区地域こぞって子育て懇談会の運営支援団体です。



みんなで なかよく とりもとう！

どの子も 未来を 自分らしく創れる社会へ

地域 こぞって 子育て

子どもも大人も同じひとりの人間である
子どもと大人は互いに学び合える
子どもたちの力は 社会に活かせる

info@kozotte.or.jp
https://www.facebook.com/kozotte.minato

こんにちは～

一般社団法人みなとこぞってネットワークです。港区立子ども家庭支援センターと明治学院大学社会学部付属研究所の共同で開催している「港区地域こぞって子育て懇談会」が10年目の節目を迎えた2015年5月に設立しました。

私たちは、地域の子ども・子育て環境向上のために、子育て中の人たちと地域で応援するよ～という多様な人たちが、共に集い、対話をする場「港区地域こぞって子育て懇談会」や、つながりの場「港区地域こぞってネットワーク会議」の恒久的な実施と、その場から生み出される成果を、地域の資源として開発することをめざして活動しております。

私たちがすべきことへミッション(Mission)～は
“人”“人”“地域”をとりもつことです。

合言葉は、「どの子も未来を自分らしく創れる社会へ、地域こぞって子育て」

- ・子どもも大人も同じひとりの人間である
- ・子どもと大人は互いに学び合える
- ・子どもたちの力は社会に活かせる

みなとこぞってネットワークの主な事業

1) 対話の場づくり事業
「港区地域こぞって子育て懇談会」(港区受託事業)
日時：2018年1月27日(土) 13時～16時
場所：みなと保健所8階大会議室

2) とりもつ事業(ネットワーク構築事業)
「港区地域こぞってネットワーク会議」(港区受託事業)
2017年6月23日(金) みなと保健所8階大会議室にて開催。

3) 他団体連携・共働事業
「平成28年度第1回港区地域福祉フォーラム」(港区社会福祉協議会主催)に協力参加。
「平成29年度地域福祉推進協議会」(港区社会福祉協議会主催)に参加。

港区地域こぞって子育て懇談会 実行委員募集!

2018年1月27日(土) 13時～16時 みなと保健所8階大会議室
詳細はメールにてお問い合わせください。メールの件名に「実行委員募集の件」
本文にお名前、所属をお書き、info@kozotte.or.jp にお送りください。
*フェイスブックでも情報を発信しております。
https://www.facebook.com/kozotte.minato

参加者の思いや活動が、有機的につながって連携するプラットフォームを一緒に構築してまいります。ご支援、ご協力をお願いいたします。

「一般社団法人みなとこぞってネットワーク」活動紹介

に活用されていない。法人のホームページ作成が行えていないが、ネット上の発信はフェイスブックの公開情報活用でよいかな等も課題である。

6) 地域こぞって子育て懇談会(実行委員会やネットワーク会議含む)との関係(期待)

いろいろな人に実行委員になってもらえるよう、様々な既存の場を通じ、呼びかけたい。

7) 子ども・子育て環境向上のため望むこと(地域社会や行政に対して)

子ども・子育て支援のネットワークをつくっているが、可視化できるネットワークは、支援する側中心なので、現在受ける立場の人たちにどう伝わっているのか、伝わっていないのか現状ではわからない。子ども・子育て環境向上のためのネットワークとして、この地域で子どもたちが育っていく姿や、子育て当事者たちが「た

すかったわ」と思えるネットワークづくりを今後進めていきたい。そのためには、地域内の子どもたちを直接支援する現場や、要支援者に関わる行政等が関与するネットワークと、より一層有効な連携を求めていく必要があるだろう。

8) 今後の展望

7)に挙げた、子ども・子育て環境向上に資するネットワークづくりが、今後の展望のひとつである。そのためには法人として拠点を持ち、現状の活動をより実効的に継続していく必要がある。同時に拠点は、支援の資源が少ないと思われる中高生たちが集まってこられ、地域の様々な大人たちと関われる居場所になればよいという願望もある。一方、本法人の事業内容は、中間支援中心であり、直接支援を手がけなくてもよいとの意見もある。今後、公益法人化するためにはどうあったらよいか、より詳し

い団体との共働も模索したい。

4 考察

「港区地域こぞって子育て懇談会」関係者から生まれた事業や活動の記録化から、地域活動上の課題、地域内の団体間のネットワークの有り様、実践者の視点による子ども・子育て環境の有り様等について考察した。

1) 地域活動上の課題

①運営面の人手の確保

運営面の人手を求める団体が複数存在した。求める人手に関し、切り口は団体により異なる。それは、共に活動する若い人がほしい、港区を地元とする人に来てほしい、プレーリーダー養成を求める人を得たい等である。人手確保のために懇談会を活用しようという団体もあるが、活動者中心のネットワーク会議や懇談会は人手募集には有効でないという団体もあった。一方、経験豊富なシニア層が、運営面を応援し共働する取り組みを始めた団体もあった。他団体にとっても示唆のある取り組みといえよう。

②資金面に関する課題

資金面に関わる課題が2団体から挙がった。課題の打開策として、会費徴収等会員制度の明確化、広告収入の扱い、団体の成果物の有償頒布等も挙げられた。発送費負担が大きいことから、行政の手段(具体的には区役所の交換便)提供を求める要望もあった。

③連絡手段やインターネットによる広報上の課題

多世代が運営に関わる上での課題といえるが、連絡手段が様々で、一本化できないという課題があった。また、ホームページの作成やその維持、メーリングリストやフェイスブック等、SNSの効果的な活用について、人手確保のほか、技術的な課題や活用のための周知の課題もありそうである。

④団体内の社会的意義共有の課題

研修への参加機運の醸成や、子どもに向き合う以外の活動の重要性認識への課題があった。活動の社会的意義の共有に課題があるという。イベント出店へのコンセプトを共有しきれなかったとの課題も同質だろう。一人で行う活動でない限り、ビジョンや果たすべきミッションを明確にし、それらをメンバー間で日常的に確認できるとよい。だが活動形態によっては、そのためのチームビルディングも課題だろう。

⑤活動拠点の確保

法人化した団体から、機能を果たすため拠点を確保したいとの課題があった。

2) 地域内の団体間のネットワークの有り様

地域内の団体間のネットワークの有り様として、すでに築かれているつながりを基に、新たな事業や企画を模索したり望む内容が窺えた。事業等を共働することで、さらにネットが厚くなり、新たなネットを拓げられる可能性がある。ネットワークとは、ただつながるだけよりも、ワーク(事業等)の実現のためにネットするのが望ましいというが⁽¹⁰⁾、そうしたことを複数の団体が求めているといえる。挙げられた内容は、以下である(すでに行われている取り組みを含む)。

① 小規模グループに草の根的に声がけして地道に関係を紡ぎ、既存のイベントに共に出店する。

② 経験豊富なシニア層との共働による運営を図る。

③ 子どもたちの課題に取り組む関係団体が共働して、地域社会へ発信する企画を創る。あるいは、独自に企画を行う団体に相乗りし合う。

④ ある活動テーマ(例：発達の課題)に特化した団体間の連絡の場を創る。

- ⑤ 地元港区の活動者募集の催しを関係団体と企画する。
- ⑥ 企業と非営利団体との出会いとマッチングの場を創る。

3) 実践者の視点による子ども・子育て環境の有り様等

実践者の視点から望まれる子ども・子育て環境として、以下の有り様を捉えることができた。

①子どもが今を自由に遊び切ることのできる地域

大人は見守るのみで、子どもによる、子どものための、子どもだけのまちづくりをする「こどものまち」を実施できたり、本来大人は行けない、子どもたちが子どもたちだけで、自由に遊ぶ場が多数存在する地域。子どもを監視したり、大人が作ったプログラムを押しつけるのではない、子どもが今を自由に遊び切ることのできる地域でありたい。

②子どもたちの声を聴こうとする大人がいる地域

活動を通じ、この地域には、子どもたちの声を聴こうとする/心配をする/見守る大人がいることを、子どもたちに示したい、示そうという視点があった。まさに地域こぞって子どもたちを育むよ、という安心感を子どもたちに向ける地域、そうした子ども・子育て環境でありたい。資源の少ない中高生の場合の展望も同質の思いだろう。

③多層の支援やそれらの連携が有機的に織りなされる子ども・子育て環境

子ども・子育て環境向上のためのネットワークとは、課題のある子ども家庭を含め、子どもや子育て当事者にとって、有意義と捉えられるネットワークであろう。諸団体の活動による支援、個人による支援活動、児童相談所による高機能の子ども家庭支援、子ども家庭支援センターによるすべての子どもと子ども家庭への支

援という、多層の支援や、それらの連携が有機的に織りなされる子ども・子育て環境を築いていきたい。

おわりに

本報告は6組の「港区地域こぞって子育て懇談会」関係者と、情報整理のために改めて面談し、まとめた。活動には多数の課題があるが、築かれたつながりを基にした展望や、実践者たちの描く子ども・子育て環境は、子どもたちの力を信じるまなざしと共に、まさに「地域こぞって子育て」の実現を願うものだった。展望や望む環境をめざし、今後また日々の実践を丁寧に積み重ねていくことと思う。冒頭述べた通り、当所ソーシャルワーカーにとっては、コミュニティワーク実践展開のための、地域内ニーズを知り得る機会となった。今後も微力ながら共に実践をしていきたいと思う。6組の関係者の皆様に、改めて面談へのご協力に深く感謝したい。

【注】

- (1) 平野幸子「『港区地域こぞって子育て懇談会』2006年度～2015年度実践報告」明治学院大学社会学部付属研究所年報第47号、2017年発行参照
- (2) 「港区まち・ひと・しごと創生総合戦略 港区みんなと子育てシンポジウム」2016年7月16日(土)に開催されたイベント。港区とNPO法人あい・ぽーとステーション共催。
- (3) 2005年度に当所が開催した市民講座。テーマは「都心で子育てまっ最中! ママ・パパからの発信～子育てをささえる地域創りとは～」講座の企画過程で、港区立子ども家庭支援センターに協力を求めたことが、「港区地域こぞって子育て懇談会」共催へとつながった。
- (4) 千葉市の事業「こどものまちCBT」以下千葉市のサイトより: 開催前の企画段階から、子どもが主体的に関与し、子どもたちだけで市役所をはじめ、お店や会社などを運営する「ごっこ遊び」の集合体として“まち”を運営する。参加する子どもたちは、“まち”のお店や会

社で働き、対価として“まち”の中だけで通用するお金“カフェ”を使った買い物やCBT市長選挙などの疑似社会体験をする中で、協働作業や協議による課題解決を通して、社会へ参加することを学ぶプログラム。市では、こどものまちへの参加を通じ、子どもたちは、自らの考えを表明し“まち”づくりに参画することが自分たちの“まち”を良くしていくことを学び、社会に主体的に参加していくことの大切さを身につけてもらえると考えている。

- (5) NPO法人チャイルドライン支援センターは、日本にチャイルドラインを広め、子どもの声に耳を傾ける場を醸成すると共に、受けた子どもの声を社会に還元しながら子どもが生きやすい社会基盤作りを促進していくために設立された。各地のチャイルドライン実践団体をサポートしている。上記支援センターによると、チャイルドラインは、18歳までの子どものための相談先で、子どもたちに4つの約束(秘密を守るよ、名前は言わなくていい、どんなことも一緒に考える、切りたいときには電話を切ってもいい)を掲げている。
- (6) 港区のサイトによるとプレーパーク事業に関し、「港区子ども・子育て支援事業計画」や、「港にぎわい公園づくり基本方針」及び「子どもの遊び場づくり20の提言」に基づき、子どもがのびのびと思い切り遊べるよう禁止事項をできるだけ少なくし、「自分の責任で自由に遊ぶ」ことをモットーに、子どもがやりたいことを自分自身の手で実現していく冒険遊び場(プレーパーク)づくりに取り組んでいる」と説明されている(2017年9月24日現在)。
- (7) 港区のサイトによるとチャレンジコミュニティ大学は、高齢者や高齢を迎える方が、学習を通じて個々の能力を再開発し、自らが生きがいのある豊かな人生を創造するとともに、今まで培ってきた知識・経験を地域に活かし、地域の活性化や地域コミュニティの育成に積極的に活躍するリーダーを養成することを目的としている。また、区内にある大学との連携により、地域や区政への区民参画、区民協同の推進を目指しているという。明治学院大学が港区と連携し2007年度より運営している。

CCクラブは、上記大学修了者のOBグループ。

- (8) NPO法人日本冒険遊び場づくり協会のサイトによると、プレーリーダーとは、冒険遊び場(プレーパーク)には欠かせない存在で、役割は「子どもがいきいきと遊ぶことのできる環境をつくること」で、具体的には以下の説明がされている。「子どもの興味や関心を引き出すよう、いつも遊び場を整備し、変化する遊び場の状況に応じて注意を払い、子どもに声をかける。子どもといっしょに思いきり遊び、子どもが厚い信頼をよせる相手となり、子どものよき相談相手になることもある。ケガやトラブルにも対応する。大人は子どもの遊びを規制しがちになるが、子どもにかかわって子どもの気持ちを伝える。子どもののびのびとした成長を見守る輪を地域に広げる。ヨーロッパでは『プレーワーカー』『ペタゴ』などとも呼ばれ各地で活躍している」
- (9) みなと子育てネットWa.Wa.WaML事務局が管理運営しているメーリングリスト。主に港区内の「子育て」「子ども」「地域」等のキーワードの情報を発信する目的で運用されている。会議の参加者へ登録を促したり、懇談会報告書等で登録と活用を呼びかけている。
- (10) 2008年度活動スキルアップ講座まとめP25の講師：加留部貴行氏による「ネットワークって、どんなつながり?」参照。「『ネットワーク』とは怪しいことばである。気をつけなければいけないのは、『ネット』と『ワーク』という言葉に分けて考えた方がよい。『ネット』とは、集まった人たちがいて名簿があるだけでできあがる。(中略)必死に作り時間をやりくりして出会ってみるが、では何をするのか?となる。『ワーク』がない。形から入ると『ネット』『ワーク』になる。私は逆の考えで、まず、『ワーク』をみつけましょう!です。われわれは何をするのだろうか、何をしなければいけないのだろうか?何をめざしているのだろうか?それを実現するために、その手段として、『ネット』を張りましようと考えている。なので、『ワークネット』という言葉はないが、この考えを推奨したい。」